
言語研究センター共同研究

モダリティ研究：— 言語の個別性と普遍性 —

佐藤裕美

本共同研究グループがテーマとしているモダリティとは、話者の命題についての態度が言語表現を介して表出したものであると考えられるが、命題の構造的考察を中心に展開してきた統語論の研究が、近年、文の語用的機能も含んだ構造構築へと進展するのにもない、意味論、語用論、情報構造などの関連する分野とのインターフェースの研究も重要になってきた。この共同研究グループは、メンバーそれぞれの研究領域におけるモダリティの捉え方や分析について研究成果を交換し、また異なる領域との接点について議論する機会となっている。また、英語、中国語、韓国語、ロシア語、スペイン語、日本語を含む様々な言語の12名の研究者からなるグループであり、個別言語研究はもとより、モダリティに関わる言語の普遍性についての洞察が深められること、そして、得られた知見を言語教育に応用し貢献することを期待している。

今年度の主な研究テーマは、モダリティ研究と

言語教育であり、7月にはこのテーマで、アンドレイ・ベケシュ氏（リブチャーナ大学教授）、砂川有里子氏（筑波大学教授）、黒沢晶子氏（山形大学教授）をお招きし、ワークショップを開催した。講演・研究発表7件に加え、学内外からの参加者による活発な討議が行われ、モダリティと言語教育の関係だけではなく、教育現場から得られるデータが理論研究にとっても示唆に富んだものであるという意味においてもたいへん有意義な機会であった。

さらに、今年度はこれまでに、文彰鶴氏による文末形式についての日本語/韓国語の対照研究の発表を中心とした研究会も開催している。また、過去2年間のモダリティと語用論、モダリティと統語論をテーマにした研究成果を言語研究センター叢書第1号として刊行する準備を現在進めている。